

COAR-SPARC Conference 2015 参加およびミーニョ大学訪問調査報告書

出張内容：COAR-SPARC Conference 2015 参加およびミーニョ大学訪問調査

出張者： 千葉大学 三角太郎
鹿兒島大学 西菌由依
※ ミーニョ大学調査は三角のみ

日程および出張地：2015年4月14-16日 COAR-SPARC Conference 2015 (Porto, Portugal)
4月17日 ミーニョ大学 (University of Minho)訪問調査 (Braga, Portugal)
※ COAR-SPARC Conference のスケジュールは別添参照

出張目的：

学術情報の円滑な流通の実現手段として、オープンアクセスは究極的な方策であり、その促進にむけてIR推進委員会は活動しているところである。一方で、学術情報は本質的にグローバルであり国家の壁に限定されるべきものではなく、国際的な協調をはかりながら促進すべきものである。

COAR (Confederation of Open Access Repositories)は、ヨーロッパを中心とし、世界各国のリポジトリの組織化によるオープンアクセスの促進をミッションとする団体であり、IR推進委員会のオープンアクセスのミッションとも合致する。今年度は、同じく学術情報流通促進をミッションとする SPARC との共同で年次カンファレンスを開催することとなったが、世界的な学術情報流通のためには極めて重要な場であり、今回、三角および西菌の二名が参加し、情報交換および今後の戦略についての議論を行った。

あわせて、ミーニョ大学のオープンアクセスの実施状況についての調査を三角は行った。ミーニョ大学は世界的に見ても、もっとも早い時期に機関リポジトリを構築、OAポリシーを策定している。ポリシーは2011年に改定し、大学構成員に対する義務化を実施することにより、約70%の登録率を維持している。我が国の昨今の状況から見て、オープンアクセスの義務化が今後求められる事が予想されるが、その際に必要とされる実施体制は未知数である。今回、近隣のポルトで開催されるカンファレンスにあわせて、ミーニョ大学を訪問し、現場の担当者への、ワークフローおよびスタッフの体制についてのヒアリングを行った。

概要報告：

[1]COAR-SPARC Conference 2015 (Porto, Portugal)

【4月14日】

は、COARのBreakfast Club Meeting、General Assembly、Workshop、Strategic Committee Meetingに参加した。

Breakfast Club Meeting は、COAR 内に設けている、研究 WG の主査を司会とするグループディスカッションであり、参加館の意見を主査が吸い上げる場となっている。今回は以下のグループが設定された。

1. Engagement with early stage researchers and student community
2. Open educational Resources
3. Linked open data
4. Controlled vocabularies
5. Training
6. Open access licensing
7. Open metrics

三角は 2 の Open educational Resources に参加したが、オープン志向のリポジトリシステムを、クローズな教育の場のプラットフォームとして用いることの限界が参加者から指摘された。一方で、紙媒体のコンテンツの確保が困難な国もあり、オープンアクセスのコンテンツの充実が教育の場でも望まれるとの発言もあった。

西菌は 6 の Open Access Licensing に参加した。出版社との交渉により成果物をすべてリポジトリに登録する国家的取り組みの事例を挙げながら、COAR としてはゴールド OA でなくグリーン OA に焦点をあてて取り組んでいくことが強調されていた。また、出版社によるリポジトリへのダイレクト登録についての意見交換が行われたほか、著作権や OA ポリシー遵守に関する研究者の意識を向上させる必要性が指摘されていた。

General Assembly では、COAR の活動方針について議論され、チェアパーソンが、Lossau, Norbert 氏 (Georg-August-University of Göttingen=ゲッティンゲン大学) から Rodrigues, Eloy 氏 (University of Minho=ミーニョ大学) に交替となった他、Board Member は大きく変わる事となった。特に、アフリカからは初のメンバーとして、Selematsela, Daisy 氏 (National Research Foundation South Africa) が選出された。これは COAR の世界戦略として注目すべきである。

※) 新メンバーは下記参照

<https://www.coar-repositories.org/news-media/new-coar-executive-board-elected/>

Workshop のテーマは「Librarians skills and competencies」である。Iryna Kuchma 氏 (EIFL)、Pedro, Principe 氏からの話題提供があり、その後に活発な議論が交わされた。議論は伝統的な図書館業務でなく研究データを図書館として扱うために、どのようなトレーニングが図書館員には必要か？が論点であった。Kuchma 氏からは Foster の活動についての紹介があり Principe 氏からは IDCC15 における WS 内容を元に様々な情報源についての紹介があった。

参考)

1) Foster

RDM のための Toolkit も準備されており参考になる

<https://www.fosteropenscience.eu/>

2) Principe 氏のプレゼンテーション資料

様々な情報源が紹介されており参考になる。プレゼン資料

<http://www.slideshare.net/pedroprincipe/rdm-librarians-skills-competencies-roles-training-coarsparc-workshop>

Strategic Committee Meeting はメンバーを絞り、COAR の運営戦略について、より密度の高い議論を行うことを目的としている。主な論点としては、リポジトリの連携をいかにすすめるかである。世界規模の interoperable なネットワークの構築が、学術情報の活性化のためには必須であるという点は共通認識であるが、その実装をどのように行うか、また日本にも、今後の連携を検討することが求められた。研究データについては、Research Data Alliance の動きが活発であり、どのように連携していくかがキーポイントとして挙げられた。Publisher の Direct Deposit についても重要な課題であるが、まずは情報収集ということになった。

【4月15日】

最初に Welcome と Opening Keynote があり、それにつづき、三つの Session があった。全体のプログラムは以下で、以下でプレゼン資料も公開されている。

<https://www.coar-repositories.org/community/events/annual-meeting-2015/programme/>

Opening Keynote

○ “Designing Open Research Systems” - John Wilbanks, Chief Commons Officer, Sage BioNetworks

研究成果をオープンにすることの意義、効果そしてそのために必要なことについての包括的な議論であったが、ただ公開するだけではなく、再利用を可能にすることが重要であると強調されていた。

Session1: The International Policy Environment, Chair: Eloy Rodrigues, Room: Auditorium

○ “OA policies - where we are and what we know about effectiveness” - Lars Bjørnshauge, Director of European Library Relations, SPARC Europe

○ Jennifer Hansen, Manager, Information & Research Services, The Bill & Melinda Gates Foundation, USA

○ “Open Science policy and infrastructure support in the European Commission” - Jarkko Siren, European Commission

○ “Open Access in Argentina National policies, international alignment” - Marisa de Giusti, Universidad de La Plata, Argentina

オープンサイエンスを実現するためにどのようなポリシーが立てられているか、ポリシー調査の報告や、ラテンアメリカ、The Bill & Melinda Gates Foundation、European Commission 等の立場から報告があった。特に Bjornshauge 氏の報告は興味深かった。前半はポリシーに関する調査の報告であったが、後半で Green 路線の限界についての意見が述べられた（プレゼンスライドは slideshare でも公開済）。

参考)

“OA policies - Where we are and what we know about effectiveness”, Lars Bjornshauge

<http://www.slideshare.net/SPARCEurope/oa-policies-where-we-are-and-what-we-know-about-effectiveness-47026478>

Session 2: Organisational Models for Research Data Management Services, Chair: Lorraine Haricombe, Room: Auditorium

- “ Organizational Models for Research Data Management Services ” - Gerald Beasley, Vice-Provost and Chief Librarian, University of Alberta, Canada
- “Co-operation with scientists - road to RDM services in the University of Tartu Library” - Liisi Lembinen, Acting Director of the Library, University of Tartu, Estonia: “Co-operation with scientists - road to RDM services in the University of Tartu Library”
- Research Data Management Services at Cape Peninsula University of Technology” - Elisha Chiware, Director of Libraries, Cape Peninsula University of Technology, South Africa

研究データ管理についての報告があった。Beasley 氏より、プラットフォームとして Hydra Project についての紹介があり、技術的に参考になりそうである。またエストニアにおけるオープンサイエンスの先進的な取組み状況についての報告があった。

○Hydra Project

<http://projecthydra.org/>

○OPEN ACCESS AND OPEN DATA IN ESTONIA PROJECT

<http://eifl.net/eifl-in-action/open-access-and-open-data-estonia-project>

Session3: Global Alignment and Collaboration, Chair: Norbert Lossau, Room: Auditorium

- “Global Alignment and Collaboration” - Johanna McEntyre, Director, Europe PubMed Central
- “The Open Science Framework: a Free, Open Source Solution for Connecting Global Research Infrastructure” - Andrew Sallans, Partnerships, Collaborations, & Funding Manager, Center for Open Science
- “Aligning Repository Networks and the Confederation of Open Access Repositories (COAR)” - Kathleen Shearer, Executive Director, Confederation of Open Access Repositories (COAR)

グローバルな OA movement の連携について、様々な視点からの報告があった。特に Shearer 氏の報告では、“COAR は、リポジトリのグローバルネットワークの拡大が、access と visibility を変えるポテンシャルをもっていると信じている”、とコメントし、世界各国の状況として中国の例をあげていた。これは Aligning Repository Networks Meeting Rome, March 2014 に中国から参加はあったが、日本からは参加していない事が影響しているのではないかと考えられる。日本からの積極的戦略的な contribution が必要ではないか。

【4月16日】

午前中に 1 session の後に Closing Keynote があった。

Session4: Assessing Value, Chair: Lars Björnshauge, Room: Auditorium

- “Enlighten: Adding and Assessing Value” - William Nixon, Digital Library Development Manager, University of Glasgow, UK
- “Scholarly communication and evaluation: from bibliometrics to altmetrics” - Stefanie Haustein, Universite de Montreal, Canada
- “Research Assessment Reflections as per the Brazilian Experience” - Nisia Trindade, Vice-President, Foundation Oswaldo Cruz, Brazil

様々な評価指標についての報告があった。特に Haustein 氏の報告は、具体的な統計分析に基づいたもので参考になった。

参考)

Scholarly communication and evaluation: from bibliometrics to altmetrics, Haustein 氏
<http://www.slideshare.net/StefanieHaustein/haustein-coar-sparcapril2015>

Closing Keynote & Conference Closing

- “Repositories as key players in non-commercial open access ? a developing region perspective “ ? Dominique Babini, CLACSO ? Latin American Council of Social Sciences Keynote Speaker - Dominique Babini

Closing Keynote として、今後の方針の提案があったが、そのまま引用すると

Actions towards a global inclusive OA future based on repositories

1. repositories as publishing platforms
2. repositories as source of indicators for research evaluation
3. repositories as faciliators for research cooperation and open science

これは日本が今後進めていかなければならない方向とも合致していると思われる。

午後からは午後からは COAR WG と「Aligning Repository Network Meeting」が平行して開催された。三角は Vocabulary の WG に参加した。国家を超えてリポジトリを連携させるためには、使用言語の壁を超える必要があり、そのためには様々な用語の言語間の対応表が必要である。現在対応表を作成しているところであるが、日本語はまだ手をつけていないとの事であったので、三角の方で日本語部分を作成するという事になった。

西菌は Usage Data の WG ミーティングに参加した。ゲッティンゲン大学の Daniel Beucke 氏を進行役として、標準化された利用統計への取り組みについて、事例報告や今後の方針についての意見交換が行われた。エストニアでは Dspace で構築された 28 の機関リポジトリについて統計を比較できるツールを構築しており、OpenAIRE との連携も視野に入れているとの事例報告があった。また、altmetrics について IR への導入状況の調査結果も紹介された (Ranking Web of Repositories の上位 100 位のうち、altmetrics 導入機関は 9%等)。WG としては、利用統計に関するさまざまなプロジェクトについての情報収集を行い、国を超えて同一条件での比較ができるよう国際的なプロジェクトを目指すこと、2 か月ごとに報告を行っていくこと、が確認された。なお、COUNTER の基準が必ずしもリポジトリに適しているとは限らない、DOI や ORCID はコスト負担感がある、といった意見も出ていた。

[2] ミーニョ大学 (University of Minho) 訪問調査 (Braga, Portugal)

4月17日にミーニョ大学を訪問した。特にミーニョ大学のOAのワークフローについて、Saraiva, Ricardo氏に説明いただいた。ミーニョ大学は10年以上もの間、OAの先頭を走っている大学で、千葉大よりも前にIRを立ち上げて、さらにOAポリシーを強化して、現在は発信論文の70%をOAでカバーしている。特にワークフローとスタッフ数について訪問調査させていただいた。

ミーニョ大学では、100%IR専従はRicardo氏一人。その他の担当者は6人だが、他の業務もしているのでエフォートでは計1~2人くらい。OAポリシーは2011年に「推奨」から「義務」に強化。義務と言ってもペナルティはないが、個々の研究者の業績評価に直結させている。登録は基本的にセルフアーカイビングであるが、四半期毎にOA状況についてのモニタリングをおこなっている。モニタリングはミーニョ大学から発表された論文を、WOSとSCOPUSでリストアップして、それがオープンアクセス化されているかどうか一本一本チェックし、部局ごとにまとめてレポートを作成する。レポートは、個人の他、副学長・部局長等に送付している。このレポート作成は負荷が高く専任のRicardo氏が毎回2週間程度かけて作成すること。

*) 下記がセルフアーカイビングガイド (ポルトガル語)

<http://repositorium.sdum.uminho.pt/ab.../deposito/deposito.htm>

使用システムはDSpace、入力フォームも見せていただいたが、DOIやNAID入力によりメタデータを外部サイトから取得することができる。ライセンスのチェックも基本的に研究者本人が行うということだが、それも入力フォームページから容易に確認サイトへアクセスできるように、サイトがデザインされている。著者版ファイルは受理から時間がたてばたつほど失われる可能性が高いので早め早めに連絡しないと、との事だった。登録時には研究者自身が自分の連絡先の入力するフィールドもある。限定公開のコンテンツでも著者への直接連絡ができるようにとの事であった。その他FacebookやTwitterへのリンク付けのツールの用意など、システムが丁寧に作りこまれている印象をもった。

例としては

1) 著者IDによるリストアップ

<https://repositorium.sdum.uminho.pt/browse?type=author&authority=3916>

2) 個々のコンテンツの記述ページ

<https://repositorium.sdum.uminho.pt/handle/1822/20542>

下部にFacebookやTwitterのアイコンがある。

2011年にOAポリシーを強化後は、それ以前のコンテンツも増えたとのこと、義務化もさることながら、研究者への「意識付け」につながったことが大きい。研究者の「教育」が重要だとのことであった。

今後の課題として「研究データ」「OAパブリッシング」を挙げられたが、マンパワー不足で、本格的な取り組みができていない、との事であった。

所感

昨年の COAR のカンファレンスは OpenAIRE との合同開催であり OpenAIREplus の終了にあわせて開催された。Horizon 2020 にむけてのプロジェクトの頭出しという色あいが強く、OpenAIRE の後継プログラムがスタートしていなかったため、具体的な取り組みが少なかった。しかし今回はかなり具体的な取り組みが見えてきた印象をもった。

・研究データ対応

FOSTER による教育用ツールが開発されており、我が国としても参考にあるであろう。一方で、プラットフォームについての議論は今回のカンファレンスではあまり見られなかった。

・Direct Deposit

RCUK 等において、従来とは異なる形でのスキームが出版者側から提案される兆しがあるが、COAR 側としても SPARC 側でも、現時点では具体的な対抗案を検討する段階に至っていない。しかし、出版社に対しては、国家を超えた strong plan が必要であり、COAR のネットワークを通して密にコミュニケーションをとる必要があるだろう。

・アクセスログの収集プロジェクト

複数のリポジトリサーバからの、アクセスログの自動的収集プロジェクトがスタートしている。OpenAIRE は EC 助成プロジェクトの成果の可視化をミッションとしているもので、成果の利用を集約するシステムが必要とされている。このプロジェクトでは、各サーバーでログをメタデータに変換し、OAI-PMH でハーベストするとの事であり、IRDB 等でも参考になるのではないかな。

今回、チェアパーソンがポルトガルのロドリゲス氏に交代となったほか、南アメリカ、アフリカ地域からもボードメンバーを選出されている。アジア地域からも意見を出すチャンネルを維持する必要があるだろう。

学術情報は国・地域に閉じられるものではない。汎世界的なオープン化が実現されてはじめて、情報流通の真の活性化は実現される。オープンサイエンスの実現のためには、アジア地域における学術情報流通の活性化が今後ますます重要となってくるであろう。非公式のかたちで、中国およびスリランカからの参加者、および COAR の Chairman に、アジア地区でのオープンアクセスの活性化のために、アジア・リポジトリ・ネットワークの可能性について打診したところ好反応であった。IR 推進委員会へ具体的なネットワーク構築にむけた検討を提案したい。

(文責 三角)